

漢字と戦争

日本語の「常用漢字」を増やすという議論が続けられてきて、もうすぐ実施される。多くの日本人は、いま定められている「常用漢字」(1,945字)よりもたくさん漢字をふだん使っているし、読めるはずだという考えが、根底にはある。

戦前の記録で、「兵器名称及用語ノ簡易化ニ関スル規程」というものが残されている。これは、昭和15(1940)年2月29日に大日本帝国陸軍省副官・川原直一の依命通牒つうちょうとして出されたもので、軍隊の中で常用する漢字の数を原則として計1,235字に限定せよ、という内容になっている。その理由が現代から見ると振るって、「日中戦争以降の兵員構成の変化を受けて、兵士の平均学力が尋常小学校四年程度にまで低下したために、難解な兵器名称の教育が極めて困難になった」(文化庁『国語施策百年史』)からだというのだ。つまり、軍隊にはどんどん新兵が入ってくるようになって、結果としてあまり漢字の読めない者が増えて実戦に支障が出てきたから難しい漢字を使うのはやめなさい、という命令なのである。

その内容を国立公文書館・アジア歴史資料センターの公開している電子化資料で見

てみると、一般兵に取り扱わせる兵器(殺傷能力を持つものだけではなく「ペンチ」などの器具も含む)については、尋常小学校四年修了程度で読める「一級漢字(959字)」を用い、これではどうしても表現できない場合や「相当ノ素養アル者ノ取扱フ兵器」に限って「二級漢字(276字)」を使うことが示されている。一級漢字・二級漢字で書けないものはひらがなで書いたり、外来語を含めた別の表現に言いかえたりするよう求められていた。たとえば、「楔・油壺・噴嘴」という語は「くさび・油つぼ・ノズル」とすることになっていた(陸軍省『兵器用語集(其ノ一)』, 昭和15年5月)。

新聞をはじめ当時の社会では、勇ましく漢字が多用されていた。しかし実態としては、日本人の大半には満足に読めないものであったことがうかがわれる。

個人的には、今回の常用漢字表の改定には納得のいかないところもある。ただ、「戦争に勝てるかどうか」について考えずに常用漢字の議論をできるという点では、わたしたちは間違いなく幸せな時代を生きている。この平和を、子どもたちの世代にも引き継いでゆきたい。

塩田雄大(しおだ たけひろ)